1階／ホール

光庭

1階／病棟廊下

1階／スタッフステーション

3階／ＥＶホール

1階／保護室前室

2階／デイコーナー

1階／保護室

2階／病室

3 階／職員ラウンジ

スタッフステーション／螺旋階段

3 階／医局

3 階／応接室

地鎮祭

精神科救急病棟増設にあたり地鎮祭、起工式を行いました。長年慣れ親しんだ体育館と桜並木との別れは名残惜しいものでしたが、救急病棟を必要としている方への第一歩の踏み出しとなりました。

起工式

救急病棟竣工引渡し

建設業者、設計事務所と調印式を行い、救急病棟の引渡しを受けました。

内覧会

3月26日（土）内覧会を開催しました。医療関係者に留まらず、多くの地域の方に観て頂きました。

新潟日報に掲載されました。

南浜病院、スーパー救急に

1日から 精神科2施設体制へ

新潟北区

新潟市北区の南浜病院が4月1日、精神科の救急医療を充実させた「スーパー救急」として運用を始める。県内では長岡市深沢町の田宮病院が2月から開設しており、2施設の体制が整う。両病院は地域の核として、他の病院が患者の受け入れが難しい場合の受け皿となる。

スーパー救急は診療報酬を高く設定できる分、医師や看護師の配置を充実させ、病床の半数以上を個室にするなど、厳しい基準が求められる。

南浜病院は2014年度から、スーパー救急の認可取得に向け、医師や看護師の体制を充実させてきた。プライバシーの尊重と治療環境の整備のため、対応する60病床すべてを個室にした病棟も新たに建設した。鉄筋コンクリート造り3階建て。延べ床面積は約3300平方メートル。

スーパー救急の整備により、緊急対応が必要な患者を24時間体制で受け入れる環境が整うほか、患者や家族にとっては質が高く集中した治療が受けられる。

県内の精神科救急は、医療圏を北圏域（県北、新潟・佐渡）と南圏域（県央、魚沼、上越）に分け、圏域内の病院が輪番制で患者を受け入れている。南浜、田宮の両病院は今後もそれぞれの圏域で輪番に参加しながら、当番病院をサポートする役割も担う。

南浜病院の後藤雅博院長は「患者さんや家族に寄り添い、適切な治療に力を尽くしたい」と話した。

新設した南浜病院の病棟について説明する後藤雅博院長＝新潟市北区

平成28年３月26日

医療法人　恵生会

南浜病院 精神科救急病棟 竣工

急性期治療病棟を全個室60床の精神科救急病棟として
4月1日からリニューアル・オープンします

内覧会開催
3月26日(土) 10:00～12:00
どなた様もお気軽にお越しください。

ごあいさつ
理事長 鈴木好文
南浜病院は昭和30年に精神科病院として開設し、60年間地域の精神科医療に貢献してきました。2年前から新潟県精神科救急システム北圏域基幹病院として役割を担っております。さらに充実した精神科救急病院を目指して、3年前から構想を練ってきましたが、この度すべて個室とした精神科救急入院病棟（スーパー救急病棟）60床を開設することができました。建物は3階建てで病棟は1階と2階に分かれ、それぞれの病状に合わせたアメニティーを重要視した構造になっております。これからも皆様の益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ごあいさつ
院長 後藤雅博
当院は急性期治療と地域に根ざした精神医療を多職種のチームで行うことを目標としてきました。すでに2年前より新潟県精神科救急システムにおける北圏域基幹病院として急性期の地域精神医療には貢献してきております。この度、認知症やうつ病への対応ニーズの増大など近年の精神科治療の変化に合わせ、プライバシーの尊重とよりよい治療環境を目的として、急性期病棟を全個室の精神科救急病棟にリニューアルし、一般医療と同等のサービスを提供し、今まで以上に地域に必要な精神科医療の充実に寄与したいと願っています。

●案内図

医療法人 恵生会 南浜病院
診療科目：精神科、歯科
URL http://k-seikai.jp
〒950-3102 新潟市北区島見町4540番地
TEL 025-255-2121
新潟県精神科救急システム北圏域基幹病院
子育て支援サポート企業認定

新潟日報に掲載されました。

ニュースアイ

社会復帰へ広がる支援策

変わる精神科医療

精神科医療の現場が変わりつつある。長岡市深沢町の田宮病院と新潟市北区の南浜病院が、精神科の救急医療機能を拡充させた「スーパー救急」を相次いでスタートさせた。新薬の開発に伴い、適切な治療を施すことで長期入院を回避できるようにもなった。患者の社会復帰にはなお多くのハードルがあるが、独自のプログラムを組んで社会復帰を促す取り組みも進んでいる。（長岡支社・川上あすか）

「スーパー救急」導入2病院

独自プログラムで後押し

「皆さんは普段、どのように幻聴に対処していますか」。長岡市深沢町の田宮病院。渡部和成院長の問い掛けに、患者たちはじっくり考えてから答えた。「ジョギングをします」「ヘッドホンで音楽を聴きます」

同病院が2014年から開いている「統合失調症に負けないぞ教室」の一コマだ。患者が自らの病気を理解し、対処法を見いだす後押しをする。病状の理解を進めることで、薬量削減につなげることも目指す。

統合失調症は幻聴や妄想が主な症状。日常生活に支障がないよう、症状とうまく付き合っていく方法を患者とともに探る。

受講した女性患者は「13年前に発症してから、自分の症状について語り合ったことはなかった。前向きに病気と向き合えるようになった」と笑顔を見せた。

■ ■

医療機関では、治療がどこまで進んだかを医療スタッフが評価する「クリニカルパス」（診療計画表）と呼ばれる取り組みが広く行われている。田宮病院では14年、患者自身に評価させる「クライエント・パス」を導入。患者に病気と向き合うことを促している。

社会復帰のプログラムとして、入院中にバスの乗り方や簡単な料理なども指導し、退院後の自立した生活を支援している。渡部院長は「今後は地元事業所の協力を得て、雇用につなげたい」と地域との連携にも期待を寄せる。

田宮病院で行われている社会復帰のプログラム。渡部和成院長（右）ら医療スタッフを交え、患者同士が話し合う＝長岡市深沢町

経験者と悩み語る場も

家族の高齢化などで生家に戻りにくいといった事情を抱える人も少なくない。県障害福祉課いのちとこころの支援室の長井亮室長は「地域移行を促進するためには患者の住居も必要になる」と話す。

県内の障害者向けグループホームは06年の137カ所（定員697人）から、16年3月末時点で281カ所（同1651人）に増えた。だが、17年度末に必要とされる定員は2076人と見込まれ、いずれ足りなくなる恐れがある。長井室長は「一層の施設整備を進め、地域で患者を受け入れやすくする態勢をつくる必要がある」とみる。

■ ■

南浜病院デイケア科では、同じ病の経験者が患者と悩みを語り合うなどして共有する活動に取り組む「ピアサポーター」を養成している。同病院によると、精神科医療の現場でのこうした取り組みは県内では珍しいという。

同病院では現在、3人がサポーターを目指している。自身がうつ病や発達障害で通院する傍ら、週に1回、ほかの患者が自らの病状を理解するプログラムの司会進行を務める。サポーターを目指す五十嵐雪香さん（35）は「病気を理由に雇ってもらえないことが多かった。（病気への）偏見をなくしたい」と話す。

将来は病院でサポーターを雇用する可能性もあるという。後藤雅博院長は「体験に基づいた薬や副作用の説明ができ、患者への説得力がある。サポーター自身の生きがいにもつながる」と期待を寄せた。

Q 精神疾患の患者を取り巻く現状

厚生労働省によると、全国の患者数は1999年の204万人から、2014年には392万人まで倍近くに増えた。一方で、近年では新薬の開発などで症状の緩和が期待できるようになり、入院日数は減る傾向にある。こうした状況を受け国は、患者の生活の場を医療機関から地域へと戻す基本方針を打ち出している。

平成28年5月3日